

連載 博聞意伝 世代を超えて未来を語る

第18回

宮内義彦 ———— 「聞き手」 濫澤 健

(オリックスシテ・チエマン)

(コモンズ投信会長)

戦中、戦後の価値観の変転を体験

濫澤 第九十一号(二〇一七年新年号)の「博聞意伝」に宮内義彦さんにご登場いただきました。この対談は『ほづゑ』同人の先輩方から、私が聞き手になってお仕事の周辺、あるいはこれまでの来し方から次代へのご提言を伺い、お伝えするという主旨で続けていきます。よろしく願います。

宮内さんは、現代日本を代表する企業経営者であり、世界的にも規制改革の先導者として著名であります。今日は、そうした宮内さんのお人となりの原点のこ



ろからお話をうかがっていきたいと思います。お生まれは神戸ですね。

宮内 そうです、神戸です。

濫澤 どのような幼少期を送られたのでしょうか。

宮内 どんな子供だったか随分前のことで忘れてしまいました。時代背景と申しましょうか、私が小学校に上がった時は既に太平洋戦争が始まっていた。神戸で生まれて育ったのですが、空襲もあり街中に住むことが出来なくなつて、疎開を経験しました。そして終戦時(昭和二十年)が小学校四年生、十歳です。当時のことから、この戦争に勝つんだとか「命を投げ出さなきゃならん」という空気を感じていました。ところが終戦(敗戦)を迎えて、目の前で世の中がすっかり、ひっくり返ってしまいました。それゆえでしょうか、私たち同年配の共通の類似点として、権威とか「お上」などというものに對する、懷疑と言いますか、疑い深い感情がずーっと残りましたね。今思えばそうしたいの根源は、あの折に遡ることなのでしょうね。

濫澤 価値観が真つ逆さまにひっくり返ったということですね。

宮内 そうです。例えば当時唄った歌にしても、出て来いニミツツ、マッカーサー、出て来りや地獄に逆落とし……という軍歌があつてそれを唄っていました。そしてそのマッカーサーが進駐軍の総司令官ですから……。こういう価値観のひっくり返りを経験し、実感した一番最後の世代になるのでしょうか。

濫澤 疎開を経験されたということですが、神戸という都会での生活とは全く異次元の体験をされたということなのでしょう。

宮内 当時、東京も大阪も、神戸でもそうですが、都会にいては逃げ惑う生活です。戦争が終わる頃には日本国中、都市といわれるところはほとんど総て焼野原でした。ですから、都会での生活は悲惨を極めており、学童は田舎に疎開したのですが、爆弾が落ちて来ないというだけで、それは貧しいものでしたね。

濫澤 食糧事情も悪かったのでしょうか。

宮内 食べ物で言いますと、戦争中ははるくものを食

べていませんでしたが、配給の制度があつて、配給切符を持って行けばなんとか食料が買えました。米で言えば一人当たり二合五勺とか。しかし、それもだんだんと配給される食糧が無くなつてきていましたが、食糧難という意味では、戦争中よりも敗戦後の方が大変でした。それで、戦争が終わつても、焼野原になつた神戸に帰つても駄目だということで、疎開先に寄宿していました。私と同年輩の人はほぼ同様の経験をされたのではないでしょう。

濫澤 戦争が終わつたということは、どのようなタイミングでどのように知らされたのですか。

宮内 (昭和二十年) 八月十四日に、明日、天皇陛下の重大な放送があるから皆聞く様に、という指示が伝えられて来ました。私たちの家族は皆疎開先にいたのですが、当時まともなラジオのある家はそうありませんでした。それで、わが家のラジオを外に持ち出して椅子の上に置いて、近所の人達が集まつて来て皆でラジオを囲んで聞きました。直立不動で……。天皇陛下のお話を聞くのですから。ところがこの放送がよく聞

こえないんです。ガーガーとやたらに雑音が入って。子供心にも、一体何を言っているのかさっぱり分らない。それで放送が終わつた後、私の父親が「これは、どうも負けたんだぜ!」と言つたのです。

濫澤 負けた、と聞いた瞬間、その場はどのような様子でしたか。

宮内 皆、シュンとしていました。これからどうしたらいいか分からない、という表情だった、というのを鮮明に覚えています。それからわが家で昼ご飯を食べたのですが、その折のわが家の昼ご飯は、ジャガイモ二切れと番茶でした。そのことを妙に鮮明に覚えています。ほんとにシュンとしたものでした(笑)。

濫澤 その喪失感はいくら続くことになるのですか。
宮内 それが、私にも不思議なのですが、日本人の変わり身の早さ、といいますか、気持ちの切り換えは早かつたですね。こんなに早く変つていいのかね、と不信感を抱くくらいに(笑)。……つまり、ほんとはみんな、戦争が怖くて恐ろしくて、嫌でしょうがなかった、ということでしょうね。……そのこともあつ

てか、一挙に世の中が明るくなりましたね。実際家の中も明るくなりました。それまでは灯火管制というのがあつて、夜間は電燈に黒い覆いを掛けて、暗くした電燈の下で身を寄せ合っていました。疎開先の田舎家でそんなことをしてもどうしようもないのに、日本国中そうしていました。……それが、戦争に負けた途端、その必要がなくなつたのですから。

濫澤 解放感に満たされますね。……すると、疎開はご家族一緒だったということですか。

宮内 そうです。そもそも神戸に居た理由は、父親が神戸の外資系の商社に勤めておりました。したがって少々バタ臭い雰囲気か漂っていたと思うのですが、私どもの心付いた頃には、戦雲急を告げていたということもあつてか、経営者のアメリカ人は母国に引き揚げたてしまい、当時父親は失業していたのだと思います。それで、取引先の会社の役員として迎えられています。そして、その会社が当時海軍の小さな軍需工場を経営していて、空襲が頻繁になり、軍需工場ごと疎開しろということになったのです。それで、地縁も血縁

もない全く未知のところに疎開することになりました。それで、父親は疎開先の軍需工場の責任者の一人として就労していました。ですから、そういう意味では一家が離れ離れになることなく一緒に居られたということとは恵まれていました。

濫澤 お父上は厳しい方だったのですか。

宮内 いえ、極めてやさしい父親でした。そして、外資系商社にいたということもあつてか、明治の男にしては英語が上手かつたです。……戦争が終わつて、進駐軍がやつて来て、あらゆる行政に関わっていたのですが、選挙があると選挙の立ち会いや運営のために彼らがジープで乗り付けて来るのです。しかし、小さな町には英語を喋れる者がおらず、父親が招集されるのです。そしてその進駐軍の若い兵士をもてなさなければならぬ、ということ町から特別の食糧が出て、わが家ですき焼きパーティーを行いました。私はその模様を横で見えて、うちの親父は何か訳の分からん言葉を使つて笑うとるなあ、と思つていましたが、それが一番初めの異文化との交流でした(笑)。

澁澤 将来ご自分も、そうした異文化との交流を目指したいと思われたのではないですか。

宮内 やはり、あの訳の分からない言葉を駆使して仕事してみたい〴〵と思ったでしょうね。

澁澤 お母上はどういう方だったのですか。

宮内 母親は神戸出身の都会育ちで、父親は下関から出て来た人でした。母親は優しい人で、今でいう普通の主婦という感じの人でしたね。しかし、当時家族を養うための食糧を調達し、やり繰りするのは大変だっただろうと思います。特に、戦後通貨が切り替えになつて、それまでの蓄えが通用しなくなつてしまいましたから、何かものを調達する場合は物々交換なのです。澁澤 そういった価値観の急激な変化をつぶさにご覧になつていたということですね。

宮内 そうですね、新円切り替えということですが、そういう時には通貨などよりも、物の方がはるかに流通力がありましたからね。ですから、家の中からいろんな物が次々に無くなつていきましたよ（笑）。

スポーツといえばみんな野球しかやらなかったですからね。戦後、スポーツとしてまず始めたのがキャッチボールでしたよ。戦前は野球なんて見たこともありませんでした。戦後は野球一辺倒でしたね。そのキャッチボールにしても、グローブがありませんでしたから、布製のグローブラしきものを使っていました。今思えば、戦後早速そういったものを売り始めていたのでしょうね。

澁澤 宮内さんのポジションはどちらですか。

宮内 私はずーっと草野球のピッチャーです（笑）。

澁澤 やはりそうですか。グリーククラブに入られたというのはどういう経緯だったのですか。

宮内 関西学院に入った時に、グリーククラブというのを知りまして、このグリーククラブというのは、日本で一番古い男声合唱団であり、中学部からグリーククラブがありました。そして指導の先生から、宮内君、君はいい声をしとるね。グリーククラブに入るといいよ〴〵などとうまく誘われて入ったのが始まりです。自分から入ろうと思ったことは決してありませんでした（笑）。

憧れのアメリカで勉学

澁澤 そうして激動の戦後一時期を過されるのですが、学業に就かれたのは関西学院かんせいがくいんでしたね。

宮内 西宮にある関西学院の中学部に入りました。こうして中学、高校、大学と都合十年間通いました。この学校はミッションスクールで極めてモダンな学校でした。

澁澤 閑静な環境で、きれいなキャンパスですよ。

宮内 ご存知ですか。

澁澤 講義を依頼されて伺ったことがあります。

宮内 そうですか、それはありがとうございます。今はだいたい建てこんできましたが、以前はもっと静かな環境で、何も無いところに学校がありました。

澁澤 宮内さんは、野球のイメージが強くて、そしてグリーククラブ（関西学院大学の男声合唱団）で歌つてもおられたのですよね。

宮内 たしかにグリーククラブで歌っていましたし、野球も好きでやっていました。もっとも当時としては、

澁澤 以来ずーっとメンバーの一人として歌い続けられたのですか。

宮内 そうですね、合唱というのは一度に多くの友人が出来ますからね。そうこうしているうちに、なかなか足抜け出来なくなりました（笑）。

澁澤 現在もメンバーとして歌われているのですか。

宮内 この（二〇一六年）十月に卒業生が集まって演奏会をやるのですが、お前は先輩の一人として、歌わなくてもいいから一緒にステージに立て〴〵と言われている。歌わなくてもいいからステージに立て〴〵と言われて、ハイ〴〵と言うのも癪しらくなんです（笑）……。なにせ中学部から十年間一緒に歌った仲間ですから、前後何学年かの仲間と親しくなり、つき合いが濃密になるんですね。

澁澤 いつまで年月を経ても、変らない関係はすてきですね。大学を卒業されてからはどのような進路を歩まれたのですか。

宮内 私は（一九五八年）三月に卒業して七月にアメリカに渡りました。これは不思議なのですが、当時は

ビジネス経験が無いのにビジネススクールに入れてくれました。それから、澁澤さんと違って、英語を学びながらビジネスの勉強をするという、非常にむずかしいことをやりました。

澁澤 私は、小学校二年生の時に父の転勤の関係でアメリカ社会に放り込まれて、そこから始まりました。宮内さんが学ばれたのはどちらですか。

宮内 シアトルにあるワシントン大学経営学部大学院修士課程(MBA)で学びました。

澁澤 当時としては船で渡られたのですか。

宮内 ええ、一万トンの貨物船で行きました。あの頃の日本の貨物船は乗客を乗せていました。乗客は二人でしたが、ちょっとした客室があり、食事はキャプテン以下とともに摂りました。

澁澤 戦争が終わって、幾分落ち着いていたとはいえ、初めてアメリカに赴かれる心境はどのようなものだったのですか。

宮内 アメリカというのは、日本から見るとすごい国ですよね。憧れのハワイ航路^グという歌の文句があ

りますが、アメリカは憧れ以上の存在ですよ。高揚感といえますか、嬉しかったですね。五八年ですから終戦からだいぶ経ってはいましたが、それでも当時はまだ、外貨持ち出しが禁止されていて、ビジネス以外、プライベートではドルの持ち出しが禁止されていました。だから一般的には留学など出来なかったのですが、私は父親の昔からの縁^{フキ}故^コで、留学の費用一切はアメリカ現地の知人が負担する^グという形式を整えていただいて実現しました。

澁澤 実際にアメリカ大陸に足跡を記されて、^グよし、ひとつやってやろう^グという気概が有りだったのでしょうか。

宮内 いやあ、そんなファイトはありませんでした(笑)。父親の取引相手のアメリカ人が時々日本を訪れていて、私も折々にお目に掛っていましたので、その方のシアトル郊外のお宅に、しばらく居候させて貰うことになりました。船がシアトルに着いた折に、その方とご夫人が出迎えに来て下さっていました。憧れのアメリカに無事上陸して、その方の車に乗せられてハ

イウェイを走り、お宅に向かいました。ご夫人のフイ

リスさんから^グヨシ(義彦のヨシ)、アメリカの印象はどう?^グと尋ねられて、私は即座に拙い英語で^グ外人

人ばかりや!^グと答えたところ、^グ何言ってるんだ、お前が外人じゃあないか^グと笑われてしまいました

(笑)。そういえばそうかと、……それが私のアメリカ第一歩でした。

澁澤 英語はある程度お出来になっていたのですね。

宮内 父親のこともあり、そういう環境でしたから何とか英語を学びたいと思っていましたので、外人の家庭教師についたり、夜学の英語学校に通ったりしていましたので、アメリカに来て、学校の講義の内容は解りましたね。講義のフォーマルな英語は理解出来たのですが、ただ、学友たちがワイワイ言っている、日常の会話がさっぱり分かりませんでしたね。それは今でもそうでしたね、きっちりフォーマルに言っただけされば何とか解るのですが、ワイワイと畳み込まれると、さっぱり駄目ですね(笑)。

澁澤 アメリカでは美しい女性にも多く会われたので

はありませんか。

宮内 居^おりましたね沢山、でもみんなおばあさんになっ

企業の一私人としての矜持

澁澤 アメリカ留学は二年間ですね。それで、帰国されて実業界に入られるのですが、当時進路にはどのような展望をお持ちだったのですか。

宮内 日本に帰国して、初めて就職しました。職種は海外で仕事をしたいと思っていましたから、そのためには海外との交易に携わる仕事だろうと考えていましたから、商社を二、三あたっていました。それで一番最初に採用通知をくれたところ(日綿實業)に行くことになりました。非常に単純なんです(笑)。

澁澤 入社の競争倍率も高かったのではないですか。

宮内 日綿に入った時もう一人、やはりMBAを取得された人が一年年長で居ましたね。

澁澤 社会人一年目の宮内さんにとって、その職場はどのような環境だったのですか。

宮内 どうでしたかね……、一番最初に、当時全員算盤ばんが出来るのに、私だけ出来なくて非常にコンプレックスを覚えましたね。これにはまいりました。数字の集計にしても、みんなサーッとやってしまうのに、たかが足し算なのに私は出来ませんでしたからね（笑）。その頃はまだ算盤でした。ちょうど算盤と計算機の入れ替わりの時期でしたね。タイガー計算機という手回し操作の計算機が導入されましたが、これで私はホッとしました（笑）。

澁澤 宮内さんが配属されたのは、具体的にどのようなセクションだったのですか。

宮内 一番最初に調査部というところに配属されました。調査部というのは、社長室に企画部門があつて、その下請けをさせられていました。ですから多種多様の下請けをしました。

澁澤 視野を広く業務を学べということでしょうね。

宮内 例えば会社の三カ年計画を作るとか、月例幹部会議の議事録を作れとか、まさに会社全体の、下請けの下請けのようなことをしていましたね。……これは

商社に入ったのかどうなのか分からんな、という感じでした。そういう学生時代の延長のような仕事の内容に、不満を覚えたのは間違いなく、父親にも漏らしたのでしょうね。「石の上にも三年」という言葉もある。三年辛抱しないと何とも言えんぞ」と諭さとされました。

澁澤 三年経って、具体的な進展があつたのですか。

宮内 三年経って仕事の成り立ちが見えてきた頃には、下請けの仕事プラス何らかの上積みが出来るようにになり、充実感と言いますか、展望も少し見えるようになりました。それと部署替えもありまして、海外の支店を統括するセクションに移りました。つまりそこは、海外へ出ていく駐在員の待機場所でしたね。ですから、いよいよ自分の希望の場所に移れたと思いました。どうせ行くなら先進国がいいな、などと勝手なことを考えていたところ、突如として、今度リース会社を作ることになったので、お前はアメリカのリース会社に赴いて業務を勉強して来い」ということになりました。要はノウハウを取って来いということです。それでサンフランシスコにあるリース会社（USリーシング）

に三カ月間出向し、そこで得たノウハウをリース業務の新会社（オリエント・リース）に伝えるということ

でした。三カ月間習ってきたのだから、三カ月間あれば教え切れるのだろうか、というくらいの寄り道のつもりだったのですが、そのまま寄り道になってしまっています。ですから、思い起こせばそのところで運命が決まったということでしょうか（笑）。

澁澤 日綿實業はもともと繊維関係の商社会社で、リース会社を興されるにあたっては、相応の展開も考えられていたということでしょうか。

宮内 当時商社は十数社ありまして、戦前から総合的な商社活動をしていたのは、三井物産と三菱商事くらいで、あとは伊藤忠にしろ丸紅にしろ繊維商社であり、安宅産業は鉄鋼商社というように、それぞれ専門分野を持った商社が戦後一気に総合化を計り始めました。みんな総合化志向です。日綿實業というのはもともと日本綿花というくらいですから、綿の輸入商だったんですね。これも総合化志向です。とは言っても繊維以外は弱いものですから、機械分野を強くするにはリー

スへの展開は必要だという判断でしたね。

澁澤 それでオリエント・リースに繋がってゆくということですね。そしてオリエント・リースがオリックス・グループへと成長（一九八九年に社名をオリックスに改める）して行くということですね。

宮内 オリエント・リースが出来たのが一九六四年です。から今年で五十二年ということになりますね。

澁澤 リースというと船舶から不動産、事務機器、日常のことまで実に幅広いのですが、景気の動向や経済環境の変化などのリスクとの相関が言われていますが、**宮内** 企業というのは何か新しいものを世の中に提供する、これが企業の一歩の基本だと思います。新しいものを生み出すためには、企業はイノベータータイプ（革新的）に動く必要がありますね。そうでないと、他者の真似ばかりしていても仕方がありません。イノベーターションというのはまさにリスクと裏腹であり、企業というものはイノベーターションをやるんだということは、取ってリスクを取ってチャレンジする、ということでしょうね。

濫澤 リスクを「危険性」という向きがありますが、正確な定義は「不確実性」です。いい場合もあるし、その逆もあり得るという。そしてもう一つ伺いたいのは、オリエン・リースからオリックスへと大変な成長をされましたね。この成長の実態をどのように捉えておられますか。

宮内 私は、成長したというよりも、何か新しいものをやりたい、そういう欲求のようなものをずーっと持ち続けて、ともかく昨日と同じことではなく、何か新しいものを生み出そうとした結果、上手くいったものが成長に繋がって、反面失敗して足を引っぱったということも沢山あるのですが、企業活動というのは、そういうことの連続なのだろうと思いますね。

国の規制改革に従事して

濫澤 宮内さんは長年「規制」と闘ってこられました。が、規制というリスクを伴う成長よりも、どちらかというと現状維持の意味合いが強くなりますが、宮内さんの規制との闘いを改めて何うとすると、どのよう

なことになるますか。

宮内 規制改革会議の取り纏めにしても、私から手を挙げてやったことではありませんで、私が経済同友会に入っていて、私としては勉強をするつもりでいろいろな委員会に加わりました。それは、一企業次元ではやれないような非常に広い視野でものを考えることが出来ますし、そうした議論を重ねている内に、政府の主宰する会議に加わったり、会議の議長をすることになり、そしてとうとう真中に坐ってしまった、というのが実感です。ただ、私は企業人という私人であっても、パブリックなお役目を仰せつかった時には、パブリックのために一生懸命やるのが務めであると思ったものですから、やらせてもらいました。オリックスという会社とは関係なくやったつもりです。そして、規制改革会議の委員になったからといって、私が規制改革の推進者だということではなく、広い見地での勉強というつもりでおりました。勉強して行くうちに「それは、おかしいじゃあないか」ということを幾つも発見して行く訳ですね。実のところ、そういうところに

深入りして初めて分かったことがほとんどでした。ただ「このままではおかしいじゃあないか、なんとかしろ」と言う物凄い抵抗がある。それはなぜかとよく見ると、既得権益というところが抵抗している、それで「それでは駄目ですよ」という具合に闘わざるを得なくなる、というのが実態ですね。

濫澤 なるほど、それが十年から二十年程前までの日本の実態でしょうし、現在は改革の実は結びつつあるのですか。

宮内 一番初めに関係した折の規制のほとんどは経済的規制というものでした。経済的規制というのは、例えば業界にはそれぞれ「業法」というものがあって、その業法に基づいて省庁は、開業、閉業にいたるところから生産量まで割り当てるという統制色の強い、民間経営にたいする経済的規制があり、もうそういう時代ではありませんよ。自由競争と、みなを参入を奨励した方がいいですよ」という提言がなされるということですね。この経済的規制というのは既得権益を持った抵抗勢力があったのですが、それも十年がかりで

大分きれいに出来たという自負はありますね。例えば一番初めに議論したのは、今という携帯電話がそうです。電話機はNTTが独占して貸すものだと、あるいは借りて使うものだという概念がありましたね。「電話機をなぜ借りるのだ、個々が所有してもいいじゃあないか」というところから議論を始めました。すると「電波法にはこのように書いてあります」と言ってくる、「それじゃあ、そろそろ電波法を変えたいじゃあないか」ということで議論を進めて行くと、比較的にやさしいところから改革して行くと、結局むずかしいところが残るという状況でしたね。それでも経済的規制はかなりやり遂げて、最後にぶち当たったのは社会的規制とのせめぎ合いでしたね。社会的制度になっているものを、これは経済問題ではありません、社会福祉の問題です、というようなところをどうするか。例えば医療制度、医療制度が規制改革とどう関係があるのかという意見が出ますが、「ちよつと待てよ、もつと医療を自由化したらどうか」、「冗談じゃあない我が国は国民皆保険で世界に冠たるものが出来

ているのに、指一本触れさせるものか」というような、制度に関わるところ来ると、議論がビターと止まってしまう。それは私が規制改革会議の議長を辞める時に、制度的な問題にガツンとぶつかってしまった。これは鉄の壁に頭をぶつけてしまったようなもので、「これはもう、越えろとか登るとかは考えられないなあ」というところで、この十年ほとんど止まってしまうています。だから、医療で言うところと混合診療をしると、あるいは労働法規という解職規定を作れということとは、私らの時にも議論していましたが、同じことを今日も皆さん議論していますからね。ですから、社会的規制に触れた途端に止まってしまうというのが、規制改革の現状ですね。

澁澤 労働法というのは、経済的規制と社会的規制のせめぎ合いですね。

宮内 せめぎ合いです。これは経済的規制、これは社会的規制というところから動きません。

澁澤 二〇一二年末に安倍政権がアベノミクスといわれる経済政策を掲げ、そこで「三本の矢（財政出動）」「金



宮内義彦氏、澁澤 健氏

の大株主になっていくということは、ものを言わない、言えない株主が増大することであって、逆行しているような気がしてしかたがないのですがね。

宮内 だから、日銀が実際の金融商品を買っていくというのは極限です、極限を超えているのではないのでしょうか。日銀はやるだけのことはやった、更にこれ以

融緩和」「成長戦略」が示されましたが、私が拝見すると、企業のカバナンス（統治、そのための体制・方法）は高まってきたと思いますが、その反面日銀がETF（上場投資信託）を買い込んでいるという幾分逆行しているようにも思えるのですが、企業の力を高めるカバナンスという流れについては、どのようにお考えになりますか。

宮内 企業統治が政府が行う規制改革だとすると、まことに変な話で、やはり民間の市場主義のなかで、そういう要求が出て来るべきで、投資家、あるいは証券市場からのプレッシャーとして、カバナンスを整備しろ」という動きであるべきです。ところがほとんど出てこない。政府が動き出してやっと動き出すというようなことです。私は、この動きそのものは否定しませんが、政府主導で動いたということに、日本のマーケットに懸念を抱いています。

澁澤 動きが出てきた中に、日本銀行の金融緩和政策の一環として「お札を刷る」、一般国民にとってはバーチャルマネー（仮想通貨）的なお金を通じて、企業

上やるんですかと。そして、日銀だけでは効果が出なかったということでしょうね。やはり、第三の矢が出て来なければ、第一の矢も第二の矢も空砲ですよ。

澁澤 そのような現状の中、若者たちのことですが、彼らは今の生活に満足しているようなのですが、未来への展望ということになると、一挙に不安に陥ってしまう。このことは、国にとっても芳しくないことだと思いますが、それをどうやって、未来志向の方向に導くことが出来るのかという問題があります。

宮内 私などの生い立ちに較べて、今の若い人は育ちが良すぎるんですね。豊かさ、平和が前提ですよ。勿論そうでない人もいるでしょうが、非常に多くの恵まれた人が増えています。今は大学の進学率は五割、私の時代はせいぜい一割でしょう。こうした社会状況の中にいることさえも、恵まれているということさえも分からない。こうした豊かで平和な状況が当たり前と思っている。そして、例えば、海外の状況を見聞きしたら、今の自分たちを取り巻く状況よりも良いとは思えない。なんでそんなところへ行かなきゃあならん

のか」ということになってしまふようです。そういう人たちに、「しつかりせいよ」と言うには、どう言え**ばいいのでしょうかね。**

澁澤 私は、経済同友会のアフリカ委員会に関わって
いまして、アフリカ現地で起業している若い人たちに
触れる機会があります。私の肌感覚では今の若い人た
ちの、百人のうち五人くらいの意識と行動は著しく高
いと感じています。日本国内だけでなく、アフリカで
起業したり、宮内さんが先ほど指摘されたように、
新しいものを世の中に提供することにチャレンジする
若者たちです。やはり問題なのは、優れた五%を、ど
のように残りの九五%のロールモデル（規範）とする
かということです。

宮内 ひょっとしたらアメリカ式、富士山型社会にな
って来ているのかも知れませんか。意識の高い人が引
っぱって行くという社会ですよ。私はいつも言うので
すが、日本は富士山型社会ではなく、若草山型社会
ですね。どこが頂上か分からない（笑）。仮りにもし、
優れた者が一〇%いてくれたなら、こんなに心強いこ

とはありませんね。

澁澤 この対談の究極の目的として、次世代への提言
を語っていただいています。もう既に多くを語ってい
ただいていますが、最後に一言、次代へのメッセージ
をお願いします。

宮内 先ほどの続きになりますが、自分が置かれ
ている環境が大変恵まれているということを、自覚し
て欲しいと思います。それで、日本国は大変豊かです
し、安全な社会であり、やさしい社会です。そういう
恵まれた社会にどっぷり浸かっていると、先ほどから
小言を繰り返していますが、ともかく世界を、広い視
野で自分の眼を見開いて見て下さい、そうすると、自
分がやらないといけないことが見えて来ますよ。……
と言いたいですね。

澁澤 「自分の眼を見開いて」ですね。ありがとうご
ざいました。

（みやうちよしひこ／しぶさわけん）

〔二〇一六年九月六日収録〕